
タイプ

佐倉薰流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイプ

【Zコード】

Z7669E

【作者名】

佐倉薰流

【あらすじ】

プログラマである佐桐は、好きな男に告白して振られたある日、占い師の手によって不思議な力に目覚めてしまう。それは本人の望んでいない力ではあつたが、その力を使い人のピンチを救っちゃつたりするのであらうか！？

「あーあ、なんで上手くいかないのかなあ……」

金曜の夜。

彼女は新宿の街を、足元危なげに歩いていた。顔は赤くなつており、言葉とは裏腹にちょっと陽気な表情を浮かべている。

「絶対に上手くいくと思つていたのになあ、やつぱり私、魅力ないのかしら」

そんなことを考えながら、人ごみの駅へ向かつて歩いている。どうやら、振られたらしい。

あの話し振りから行くと、絶対に自分に気はあつたはず。だけど、実際にアタックをかけてみればなんだ、逃げ腰じゃないか。男つてダメね、などと思いつつ、陽気な表情に少々悲しげな表情を浮かべ、ふとビルとビルの間の路地に、微笑みながら彼女を見ている、30代ぐらいの神秘的な女性がいた。

彼女はそれに気づき、ふらふらとそちらへ歩み寄る。

「その表情から見ると、失恋でもしたのかしら?」

神秘的な女性は彼女に声をかけた。

神秘的な女性は、占いの看板を掲げていた。

それでもなれば、彼女が気安くふらふらと近寄るわけでもない。

「恋愛運悪いのかなー?」

ちゅつと陽気な口調で彼女は答える。

「見て差し上げましょ」

神秘的な女性はそうこうと、彼女の返事を待つことも無く、彼女の手を取り、目を閉じた。

「何占い？」

彼女はそう思いながらそんな女性の様子を見ていた。

神秘的な女性は、固く目を閉じた。

時折苦悶の表情を浮かべるが、ふとやさしい表情に変わり、そして目を開いた。

「彼はあなたの強いパワーに押されちゃったみたいね」

神秘的な女性は彼女に話しかける。

「確かにねー、猛烈アタックかけちゃったから…

多分、普段の私とのギャップを感じちゃったのかなー？」

彼女は答えるが、女性は続けて言つ。

「あなたと彼の相性は悪いわけじゃない、いや、むしろぴったりといふ感じかしら」

「じゃあ、なんで振られちゃったのかなー… 今月は恋愛運が良いつてどの占いでも言つているのに」

「それは、彼があなたを恐れたからみたいね。

彼もあなたのことは好きだけど、だけどあなた自身に恐怖を抱いている…」

「何が怖いんだろう？」

彼女はちよつとよひめきながら、ほろ酔い気分で問いかけた。

「…もう、ダメなのかなあ……」

何も答えない女性に対し、失望的な台詞を漏らす彼女。女性は軽く笑つた後に、ふと表情を変えて言った。

「あなたには何か特殊なパワーを感じます。

・・・何というのかしら・・・私と同じような神秘的な力」

女性がそんなことを口に漏らすと、彼女は何か思つといひがあるのか、こんなことを言つた。

「さつき、何かを探られていた感じがするんだけど、その時……」

彼女は言葉を濁した。

そんな彼女の言葉に対し、女性は表情を固くして

「その時に？」

と問い合わせた。

彼女は、困った表情と笑つた表情を混ぜて女性に言つた。

「田の赤い猫ちゃんが頭に浮かんだ…その猫ちゃん、今風邪を引いているみたいで、あなたがすく心配しているのがそのまま感じ取れちゃつたんだけど……」

その言葉を聞いたとたん、女性は驚きの表情を浮かべた。

「あ、今すぐ動搖している？本当にことを聞いた？」

彼女は女性に手を握られたまま、どこを見るわけでもなくつぶやいた。

「……私のせいで、あなたの力が覚醒しちゃったのかしら？」

彼女は新宿の夜で起つた事を覚えているのは、これまでであった。

あれからいろいろんな声が聞こえる。

喜びの声、悩みの声、怒りの声、悲しみの声…
いつたい自分の身に何が起こったんだろう?

誰も何もしゃべっていないのに、自分の意識の中に声が容赦なく入り込んでくる。

普通の精神構造を持つた人間であれば、すぐにでも気が狂うであろう。

しかし、彼女は気が狂うところか、その声を聞きながら、どうしたら声が気にならなくなるかを考えていた。

「佐桐さん」

声が聞こえる前に振り向いた。

いや、正確には声になる前に彼女はそれを感じ取った。

「この案件だけど…いつまでできそう?」

彼女は会社にいた。

狭い部屋で、パソコンの前に座り、難しい言葉をキーボードから打ち込んでいた。

「そうですね…明日の午後までは」

さらりと言った。

先日の彼女とは違う、別の彼女がそこにはいた。
仕事とお金以外に興味を示さない、冷酷とも思われる社会人が一人、
普通に仕事をしていた。

「まあ、そこいら辺に転がっているサンプルソースを使えば・・・、
すぐに終わりそうな仕事ですけどね」

「頼もし」

彼女の淡々とした言葉に、声をかけた社員は口を開く。

（やう思つていないくせにナード）

彼女・・・いや、佐桐は苦笑いを浮かべながら謙遜してみる。
いつものことだ。

「じゃあ、よろしくお願ひします」

やつこつてまた沈黙の時間が始まる。

（んー・・・）の変な力を上手く制御できるようならいいなー

佐桐はそんなことを思いながら、キーボードをひたすら叩くのであ
つた。

帰宅後、佐桐はいつものように夕飯を済ませて休んでいた。
いつものパターンだ・・・あの日までは。
今では気が休まることが無く、いろんな声が聞こえる。
「漫画でこんな話あつたよな？」
などとのんきなことを思つていた。

「本当にこなことになると、困るよな・・・」

そういうこつ、佐桐は目を閉じて、深く息を吸つた。

そして・・・目に見えない世界へ飛び立つたのであった。

空を飛んでいるような感覚。

ただ、実体が無い。

実体が無いにもかかわらず、体で感じる事のできるこの爽快感はなんだろうか？

彼女は空でもダイブしているような感覚で、常に聞こえてくる声を一つ一つ確認するように聞いてみる。

中に、ものすごい悲壮感に満ちている声が聞こえる。

：自殺でもしようとしているのだろうか？

彼女はその声の方へ意識を近づけてみると、なんとその人物の悲壮な思いが、自分の思考のように分かる。

ああ、彼は本当に失望感なのだな。

「でも…残された家族のことを考えて、もうちょっとがんばってみたら？」

実際に声には発しないが、声をかけてみた。すると、彼の意識の変化が読み取れた。

また辛い彼の思いが佐桐の意識に入ってくる。

彼のその意識に自分が支配されそうになるが、そこは意識を失わないように強く自分を思うことで回避した。

佐桐はふと、目の前に広がる景色を見た。

肉体は目を固く閉じたままにも関わらず、佐桐にはその光景が見えた。

どこかのビルのトイレなのだろうか。

目の前に、おそらく彼のネクタイであろう物が、丸を描いてぶら下がっている。

「そんなことをしても、なんの解決にもならない」

佐桐は自分のことかのようになつて強く思つた。

その頃には、彼の悩みがすべて自分の事かのようになつてしまつた。

彼は・・・あてつけのようになつて自殺をしようと考えている。

だけど、彼にはまだ死への恐怖が残つてゐる。

それを感じ取つた佐桐は、その恐怖へ意識を持つていつた。

とてつもなく恐ろしい思考。

彼女がそれを感じ取つたとたん、彼の視線から、丸くぶら下がつたネクタイはなくなつていて。

そのネクタイが彼の右手に感じられると、佐桐はその彼から意識を切り離した。

離れるときには、「誰かの声が聞こえたような」と思つ意識を感じたが、佐桐はそれを気にすることは無かつた。

佐桐は更に、意識の空をダイビングしてみた。

見てみれば、いろんな思いがあるものだ。

しかし、人の思いが分かるといつのはなんといつのか、・面白によつまらないような。

人間「分からないほうが面白い」という人がいるが、それは今とても頷ける、そう思つのだつた。

佐桐は目を開けた。

もちろん、自分の肉体の目だ。

その表情にかなりの疲労が見える。

意識の探検は、肉体的に相当な疲労をもたらすらしい。

「カウンセラートロイになつた気分だ」

トレッキーの佐桐は、そんなことを思いながら、明日のために眠る準備をするのであつた。

「やつぱり佐桐さんは強烈な性格なんだよなー」

彼はそんなことを思いながら、隣に女の子を連れて歩いていた。
ここは新宿。

仕事を終え、言い寄られた女の子と一緒にバーを楽しんでいた。

「香川わんつてやつぱり素敵」

女の子はそう言った。

彼・・・いや、香川はそんな彼女を見つめながら、ニヤニヤしていった。

「そんなことないって」

そういうながら香川は「やつぱり女の子は可愛い方がいいよなー」などと思っていた。

そう、彼こそが、佐桐を振った男である。

「佐桐さんもなあ・・・悪くは無いんだけど」

そんなことを思いながら、隣にいる今時の女の子を見ていた。

「この子はこの子でちよつと物足りないけどな」

そんなことを表には出さずに、彼女と一人、夜の新宿を楽しんでいた。

ふと、ビルとビルの間にある、占い鑑定の看板を見つけた。
やさしそうな視線を持つた女性が、占いをするようだ。

「ねえー、私たちの相性を占つてもうおうがー？」

女の子は香川に可愛らしく言った。

そんな彼女に押されて、香川は女の子と一緒に占い師の元へと行った。

「相性見てもらえるんですかー？」

女の子は神秘的な女性に声をかける。

「はい」

女性は静かに、優しく答えた。

二人を観察するように見て、そして、香川の視線を捉えた。そんな女性の視線を気にすることなく、女の子が

「ええっと・・・私たちって、相性いいですか？」

と言った。

女性は女の子の方を見て、にっこり微笑んだ。

「私の鑑定の仕方は、一人一人じっくり見て占うので、2人いつぶんには無理だわ。

なので、一人一人見て、それぞれにアドバイスをすることとよろしいかしら？」

女性の笑顔に女の子は何かを安心したのか

「じゃあ、それでお願いします」

と言った。

香川は「料金はどうなるのかな」と思いつつ、女の子に押されるだけであった。

まず、香川を見ることになった。

女の子は、女性の集中力が損なわれると正しい判断ができるないので、という理由で、少し離れた場所で待機をしていた。

女の子のいるところから2人の会話は聞こえない。

女の子はつまらなそうな表情を浮かべながら、自分の番が来るのを楽しみに待つてゐるのであった。

女性は香川の手を取り、ゆっくりと息を吸つた。

香川は女性の手のわ柔らかさを感じながらぼーっとしていた。

ふと、女性が香川に話しかける。

「なぜ、彼女を振つて、あの女の子を選んだの?」

香川は困惑の表情を浮かべた。

「誰の、何の事ですか?」

香川の言葉に、女性は軽く笑んだ。

「あなたは彼女の事が本当は好きなはず。

だけど、普段冷静な彼女から想像もできないような情熱を感じて、それに引きを感じちゃったのね」

香川は苦笑いを浮かべた。

「彼女は仕事です」といなと思つていただけですから」

「ちよつと苦々しい言い訳をしてゐるなど、香川は自分で思つた。

別に彼女を嫌いで振ったわけじゃない……なんとなくそういう展開になってしまったと思った。

この時点で、香川はこの「彼女」が誰であるのかを察した。

「水の星座らしくないわね、情熱に押されるなんて。

あなたと彼女の相性は、お似合いだと思つわ。

情熱を冷静を持ち合わせた女性は、あなたにとつては魅力的ではないのかしら？」

「あの彼女とではなく、今の彼女との相性を占つのではないんですか？」

香川はつい言つた。

なぜここで、彼女のことを……佐桐の事を言つのである。なぜか苛立ちを感じたからだ。

「彼女は、あなたが思つているような人ではないわ。見た目はそういう風には見えないけど、まじめな恋をするひとよ。口では冗談を言つたり、本音が分からぬかもしれないけど……あなたの求めている人に近い人だと思つんだけど」

香川の言葉を無視するかのように女性は続けた。

そんな女性の言葉に香川はとうとう怒りを露にしそうになつたとき

「あの子との相性は、あなたが一番良く分かつてゐるはずよ？」

女性は香川の心を見透かしていふかのように言つた。

そして、彼の手を離し、女の子に変わるよつに促した。

香川が女のこのところへ行つとしたとき

「あの子は、氣をつけた方が良い……きれいに別れなさい」

と女性の声が聞こえた。

香川は振り返るが、女性は微笑んでいた。

香川は軽く首をかしげ、女の子を呼びに言つたのであつた。

「聞こえてよー、あの占い師、なんて言つたと思つ?」

女の子は会社の同僚たちに話していた。
その中に、香川もいる。

「えー、西田さん、びつしたのー?」

「つでか、2人つてそういう関係だつたんだ」

同僚たちがはやし立てる。

香川もそのやり取りを聞いているが、会話に参加をする気はない。
それよりも「そんな関係でもないのにな」とすり思つている。

「普通さー、本当にそうでもそつ言わないのが普通ジヤン?」

「彼とは別れなさい」とか言つんだよつ!」

「えー、何それー、なんかすごいじやん」

「てか、別れないためのアドバイスとかはなかつたの?」

会話が続く。

あの占いの後、香川は西田の愚痴を3時間は聞かされた。
甚だ嫌になつてきたところで、話していた喫茶店の閉店時間になつたので救われたものの、香川はそのことに関しても機嫌が良いわけではなかつた。

香川と西田は同じ会社の先輩と後輩の関係だ。

香川が先輩というわけで、西田が香川に一目惚れをしたらしい。

それで、先日は西田のお誘いでデートに繰り出したわけなのだが、
こんなに騒がれることになつたとは・・・

彼は後悔していた。

そう、違う会社の佐桐にも食事のお誘いをされて、で告白された。

佐桐の場合、香川にとつて仕事の先輩である。

先輩から思いもよらぬ告白をされたのだが、その後の会話でなぜか険悪な雰囲気になってしまい、思わず振ってしまったのが、佐桐との関係なのだが・・・

「俺はそんなに良い男でもないんだけどなあ・・・」

そんなことを思いながら、香川は仕事を続けていたのであった。

「ふああああ

佐桐は大きなあぐびをした。

まだ午前中だ。

しかし、毎日のように精神世界を探検している彼女は、疲労が取れずについた。

そのお陰で、だいぶ自分の能力を制御することができないようになり、常に聞こえてくる声が気にならなくなつたのだが。

要は本人の意識の問題である。

騒がしいところで友人の言葉を上手く聞き分けられるように、いろんな声が聞こえるからといって、それに惑わされることは無くなつた。

自分に必要な言葉だけを擷取すれば良いことである。

佐桐は理論的にそれに気づき、日々訓練をしていた。

そして、いつの間にか、以前のように過激になつたのである。

「しかし、疲れるよなあ・・・」

ふと口にした。

しかし、疲れたは彼女の口癖であり、誰も彼女の言葉を怪しむものはいない。

むしろ「また言つてゐるよ」と思われる程度である。

彼女はいつも通り、仕事をしながらメールをチェックした。そこには仕事のメールのほかに、香川からのメールがあった。しかし、特別なことではない。

技術職の彼女は、後輩からメールで技術的な質問をされることしばしばある。

中を確認してもその手の内容であった。

「人を振つときながら、平氣でこいつメールよこすんだよなあ・・・」

ふと、電子文字に意識を持つていぐが、そこに何かを感じ取れるわけではなかつた。

「やつぱり電子の世界はすばらしけ」

わけの分からないことを思いながら、佐桐は香川の質問に答るのであつた。

「香川さん。私のこと好き?」

お昼休みのひと時。

西田と香川は一緒に昼食を取つていた。

「んー・・・そつこつ付き合はできな「よ、今はね

香川はそう答える。

西田は既に恋人同士でいるようだが、香川はそんなつもりは全く無い。

香川は、今は仕事に集中したいのであり、できるだけ誘惑の多い恋沙汰は避けたいのである。

「でも、『デートした仲じゃん』

西田は親しげに言つ。

香川はそんな彼女を疎ましくすら感じていた。

（でもなあ・・・佐桐さんも振つちゃつてゐしなあ・・・）

なぜかそんなことを考えて理論付けしようと/orしてくる。

「い、いじやんい、いじやん。」のまま口を合つたりやねりよ。

会社内でも公認の仲なんだしさ」

西田の香川に対する態度が、社内で公認の仲にわたつてゐる。

香川には甚だ迷惑な話である。

（勝手にみんなに言いふらしやがつて・・・）

「でも・・・やつぱりね。社内恋愛てのは難しげだしょ?」

香川は西田を諭すよつて言つた。

しかし、恋は西田。

西田の耳に、アレハ葉は答えなかつた。

「香川さんの意地悪〜」

甘つたるこ声で香川に言つのであつた。

西田は自宅に帰っていた。

今日は香川に「デートを断られたらしい。

彼女は最近、香川のことで頭がいっぱいだ。

どんなことをしても、彼と関係を持ちたい、そんなことばかり考えていた。

しかし、当の香川は自分から距離を置こうとするばかり。

しかも、この間の占い師の話では「つまらない男だから別れなさい」と言われる始末。

彼女の落ち込みようは尋常ではなかつた。

西田は携帯電話を手に取り、あるとこへ電話した。

「ちよつと相談があるんだけど・・・」

そう話す彼女の表情は、尋常なものとは言いがたい。
何かこう、マフィアのボスが部下に命令するかのよつた、そんな口調で話をしていた。

その内容とは、恐るべきものであった…

「ふう

佐桐は香川から来たメールをぼんやり眺めていた。

彼の質問には普通に答えたつもりだ。

ちよつとした冗談は佐桐の常套手段であり、いつものようにユーモアたっぷりのつもりであった。

しかし、香川の受け取り方は違つたらしい。

なんだかいろいろとショッキングなことが書かれていくようだ。

「なんかあつたのかあ？」

佐桐は自分の冗談が、たまに人に通じないことを知っていたので、冷静に彼の返事を眺めていた。

ただ、今回の冗談は振られたことを受けて、結構控えめだったのにと思いつつ、ちょっとびり心配になつていたのであつた。

「私の冗談って結構キツイのかねえ」

そう思いつつ、電子文字から何か感じ取れないかと、新たな訓練を始めていた。

しかし、全く持つて何も感じじることは無い。

電子世界とは不思議だ。

まあ、所詮は電気信号の世界だから・・・と思いつつ、電子世界に再び惹かれる佐桐。

「これだから科学はやめられないねえ」

そうつづぶやくと、香川のメールの返事は書かずに、パソコンの電源を落とした。

そして、布団に入り、深く目を閉じるのであつた。

香川はコンビニで今日の夕食を探していた。

ふと、佐桐に返信したメールの内容が気になつた。

彼女は自分がその気が無いことを理解している・・・

だから、そういうのを抜きでいつものようにメールで返事をしていく

れた。

まあ、彼女はジョークが好きだから、いつも余計な話がついてくるが、今回は自分に気を使つたジョークを書いていた。だけど、自分はそのジョークすら受け止めることができずに、冷たく当たつてしまつた・・・

ふと申し訳ないと思い、から揚げ弁当を手に取つた。

「なんでも良いいや」

そうつぶやくと会計を済ませて、帰り道をとぼとぼ歩いた。月が見えない夜。

外灯だけが帰り道を照らす中、香川は佐桐の声が聞きたくなつた。たまに彼女から電話がかかってくることがあるが、彼女はいつも明るい声で話をする。

メール同様、ジョークを言いながら、いや、本題よりもジョークの方が多いが、彼女と話しているとなぜか安心する。

彼女の言葉が本音なのかそうではないのか、判断できない話術が時折不安になるが、そこが彼女の上手いところ。

とりあえず、そんな彼女のトークを、今日はなぜか聞きたかつたが、自分から電話する気にはなれなかつた。

いろいろと考えをはせながら一人、人気の無い道を歩いていた。ふと顔を上げると、知らない男が三人、目の前に立ちはだかっていた。

香川はそれを避けようとすると、彼らが自分を狙つていることに気づくと、体を反転させて走つた。しかし、しばらぐしたところで追いつかれ、何かを吸わされて意識が無くなつた。

ふと田を開けた。

真つ暗で何も無い状態から田覚めたようで気持ち悪い。

視界がなぜかはつきりしなかつたが、声だけは聞こえた。

男の声と女の声、4人ぐらいだろうか。

女の声に聞き覚えがあつた。

いつも聞いている声だ。

少しずつ視界がはつきりしてくる。

体を動かそうとするが、縛られているらしい。

必死に体をゆするも、自分の体を縛っているものが解ける様子は無い。

どうやら、ワントームマンションの一室のようでも思える。

「あら？お田覚めみたいね？香川さん」

聞き覚えのある声が香川に声をかける。

「・・・西田さん・・・」これは一体？！

重い意識をこらえながら、香川は言葉を何とか声にした。

「あなたがいけないのよ？
私が折角“お付き合こしまじょ”とこいつに、せつまつと返事しないから」

西田は香川のをじつと見て言った。

香川は自分がこれから何をされるのか、分からなかつた。

しかし、西田の狂気に満ちた田を見ると、尋常ではないことが起ると感じた。

いや、この状況であれば誰でもやつまつに違いない。

「だから、言つたじゃないですか。今はそんなつまつは無い……と」

香川は言葉を考えずにそのまま発した。
言つてからしまつたと思つた。

ここでもつと上手い言い方をすれば……
しかし、もう既に遅かつた。

「何を言つているの？」

あなたは私と付き合つて。そう決まつてはいるの。
私から言い寄つてお付き合つてもらえたるなんて、ありがたいこと
なのよ？」

ねえ？」

西田は周辺にいた男に同意を求めた。
男どもはみなうなづいている。

「親分の娘さんに言い寄られて断るなんて、滅相も無いことだぜ？」

男の一人が香川に言い放つた。

香川は理解した。

あの時占い師が「あの子は、氣をつけた方が良い……きれいに別
れなさい」と言つた言葉の意味が。

しかし、たかだか男一人で、その男を手に入れられないからといつ
てここまでやるのは異常極まりない。

香川は深い後悔の念に駆られた。

そして、同時に怒りもこみ上げてきた。

そんな彼を気にすることなく、西田は香川に言い寄つた。

「ねえ？今からでも遅くないわ。

私と付き合わない？ いえ、付き合ひなさい」

西田は動けない香川に近寄り、いやらしく体をしづつ付ける。彼の厚い胸板に自分の興奮した胸を押し付けた。

その感触はやわらかく、普通の男であれば興奮するであろう行為であるが、香川には「悪寒」以外に何も感じることはできなかつた。

「いいや・・・やっぱりお互いのためにもそれはできないよ

香川はやさしくも、不器用な言葉を漏らす。

もはや、むき出しの本音を出さないようにするので精一杯であつた。香川に彼女を欺くだけのしたたかではない。

「分からぬ人ね。そんなどひも素敵」

西田は香川の言葉を無視してそつこつと、香川の唇に自分の唇を重ねた。

甘いにおいを漂わせた彼女の行為に、香川はされるがままであつた。

「いいまでされてもお付き合ひしてもうえないのかしり?..」

唇を離し、西田は香川に再び聞いた。

彼女の視線の後ろに、男達の視線も感じる。

下手なことは言えない・・・言えないが、いいで「YES」と言えばもつと大変な結末を迎えるだらう。

・・・どうしたら良い？

香川は必死に考えをめぐらせた。

(こんな時、佐桐なら上手く言いくるめることができんだろうなあ・・・)

ふと佐桐の声が頭に浮かんだ。

彼女は話し上手だ。

こつこつ状況でも軽くジョークで乗り切るだろ。

しかし、自分にそこまでの知恵は無い・・・

ああ、こんな時、佐桐のジョークの一部でも自分で言えたなら・・・

・・・ああ、彩乃。

なぜか香川は佐桐の名前を心でつぶやいた。

なぜだらうか・・・なぜか彼女に救いを求める自分に疑問を感じる。

そんな考えに思いをめぐらせる香川に、痺れを切らした西田が、香川の頬にビンタをした。

「馬鹿な男ね！本当に！――」

そういう、怒りの表情で反対側の頬にもう一発ビンタをした。

香川は痛さと怒りと、少しずつこみ上げてくる恐怖の表情で西田を睨んだ。

その目は痛さで少々潤んでいる。

その目の潤みを見た西田はふとやせじ表情になり、椅子に腰掛けたまま縛られている香川の上に馬乗りに乗りかかり、自分で叩いて赤くなつた香川の頬を舐めた。

「私、悪くないわよ。良い女なのよ。
だから、黙つて「うん」って頷けば良いのよ」

そういう、香川の額に唇をつけた。

しかし、香川の表情は変わらない。

いや、先ほどにも増して、恐怖の表情を浮かべている。

「私の言つたことが分からぬのかしら？」

香川の体に自分の体を密接せしめて、彼の口をじつと呑つめて西田は言つた。

彼女が今度は香川に唇を求めた。

しかし、香川はそれに答えようとはしなかつた。

いや、理性ではなく、本能で答えることができなかつた。

「……わかつたわ」

そんな香川の気持ちを察したのか、西田は香川から離れた。

この後起こりうる状況を、香川で無くとも想像はできるであらう。

香川はそちらの事態のに臆した。

「言葉で言つても分からぬ場合は……体で分からせるしかないわね」

西田はそういうと、周りにいた男達にあこで指示を出した。

男達はその意味を理解して、身動きの取れない香川にじりじりと歩み寄つた。

佐桐はふと田を覚ました。

長い時間寝ていたように感じたが、実際には1時間も寝ていない。いつものように、精神世界の探検で疲れているはずなのに。

彼女は布団から身を起こした。

深く息を吸い、長く息を吐いた。

その後、あぐびをひとつして、セドビツヒツヒツかと考えた。

「やつぱり返事出すか」

そう思い、パソコンのスイッチに手をやつたとき、今まで感じたことの無い感覚が彼女を襲った。

何かに吸い寄せられるような、胸騒ぎがするような、無数に聞こえてくる中聞こえてくる、耳障りな悲鳴の様な、そんな感覚。しかし、それはほんの一瞬の出来事であった。

ほんの一瞬の出来事であったが・・・

なぜか深い不安に襲われた。

なんだらう・・・あの感覚は・・・!?

もう一度、精神を研ぎ澄ませて見る。

深く息を吐き、田を固く閉じた。

彼女が精神世界を探検するときの状態そのものだ。静かに呼吸をして、耳を、いや、意識を研ぎ澄ます。

いろんな声が聞こえてくる。

やはり、悲痛な声や悲しみの声が田立つて聞こえる。

しかし・・・それとは違つ・・・違う声が聞こえた・・・はず。

しかし、先ほどの声は聞こえなかつた。

「気のせいなのかな」

そう思つた。

そう思つことにした。

自分は最近、調子に乗つて、精神世界で遊びすぎた。

そのせいで多少感覚がおかしくなつていいのかも知れない。

「やっぱり寝よつ」

そういうつて、再び布団に入つた。
なぜか急に眠気が襲つてきた。

意識が落ちていくその感覚を味わいながら、彼女はふと、夢りしきものを見た。

椅子に体を縛り付けられている。

後悔の念と恐怖の念で精神が崩壊しそうな感覚が彼女を襲つ。

「これは悪夢？」

そうとも思つたが違う。

いや、やはり夢だろう。

そう思い、少しづつノンレム睡眠に陥つたとき、声が聞こえた。

「彩乃！！」

佐桐はカツと目を開いた。

眠りに入りかけていたにも関わらず、意識がはつきりしている。

彼女は体を起こし、深く深呼吸をした。

そして、両の手の指先をこめかみに当て、目を固く閉じた。

・・・ アイツが助けを求めている・・・

なぜ自分に助けを求めているのかは考えなかつた。

いや、なぜ彼の助けを求める声が聞こえたのかも考えなかつた。ただ、今救わねば・・・それだけが彼女の頭に浮かんだ。

どうやって助けるのだろう。

それすら考えていないけど・・・

とりあえず、彼の精神を探そう。

直感でそう感じた佐桐は、いつものように精神世界を泳ぎだした。

普段のダイブとは違い、なかなか思つように意識を捉えることができなかつた。

いや、普段は発せられる意識に自分から飛び込んでいったが、今回の場合は違つ。

一瞬の意識の波動を感じただけで、その意識を自分で探し出そうとしているのだ。

しかも、すぐに見つからないとこ見ると、一瞬だけのHELPである。

そのHELPから発信元を探し出すのは、探偵が人探しをするかのように困難であった。

いつも以上に意識の空を駆け巡る。

こんなスピードで駆け巡ったのは初めてだ。体にも堪えるであらう。

しかし、佐桐はそんな事は気にせずに必死に探した。より一層精神を集中して、わずかな意識の波動を探る。

分厚い電話帳に髪の毛をはさみ、その髪の毛の出っ張りを電話帳の

表面から感じ取るような、繊細な感覚が要求される。

どうしている？

どうして君はいるの？

佐桐は焦り出した。

焦れば焦るほど、彼の意識を捉えることはできない。

佐桐は自分に冷静になるように言い聞かせた。

焦るな・・・焦るな。

佐桐は今までの仕事の経験を生かしてみることにした。

発想の転換。

探そうとして見つからない。

見つからないなら自分で呼びかけてみよう。

佐桐は、香川の意識に届くよう、彼のことをのみを頭にイメージして、そして、放った。

君は・・・どうしているの？

男達は、怖がる香川をじっと見物していた。

いや、まずは精神的にいたぶるうつという魂胆である。

香川の額は、不自然な汗でぬれていた。

そんな彼を、西田はうつとりと眺めていた。

「怖がっている香川さんも素敵」

西田の言葉が香川の心に刺さる。
彼女がこんな女性だつたとは。

噂には聞いていた。

普通の女の子とは違うということを。

多少我が強い、強引で我慢な子であるとは思った。

その分、外見がちょっと幼い感じに見えるのが、可愛いなと思つて
いたが、正直、自分が彼女に惹かれる事はなかつた。
自分のちょっととした出来心に後悔した。
後悔しても遅いのに。

今の自分は、夢を叶えるために恋愛ことは避けているのだ。
だから、気になつていた佐桐の誘いも断つた。

正直、彼女ならいいかなとも思った。

だけど、自分は夢を取つた。

・・・なのに。

女性は分からぬ。

佐桐は言い寄つてからしさばらく自分を説得させようとしていた。
なかなか巧みに話しこみできたが、自分の強固な意志を見せると、

あつたりと身を引いた。

手のひらを返したように、今まで情熱的だった彼女が、南極の氷よりも冷たく自分から身を引いた。

それで、身を引いた後、何事も無かつたかのようにこつものように接する。

いや、多少は気を使つてくれている。

あんなに情熱的で、むしろ、佐桐がここまでやつてもおかしくないほどの熱の入り具合だったのに。

西田は本当に可愛らしい女性だ。

ただの我侭娘ぐらいに思つっていたのに、こんなに嫉妬深い女性だつたなんて。

いや、嫉妬深いどころではなく、行き過ぎている。
だが、今回の彼女の素性を知つて納得した。

おそらく、闇の実力者の娘だろう。

男共も「親分の・・・」と言つていたぐらいだ。

そんな女に惚れ込まれてしまふなんて・・・

「私はそんなに良い男じやない。見た目だつてスマートじやない。
能力だつて坂田さんみたいになんでもできるわけじやない。
なぜ・・・なぜ私なんだ?」

思わず口にしてしまつた。

西田に言つた訳ではない。

むしり、自問自答である。

そんな彼の言葉に、西田は答えた。

男達を搔き分けて香川の上にまたがつた。

そして、彼に答えた。

「それは・・・香川さんだからよ」

西田は優しく答えると、着ていたブラウスのボタンを外した。
そして、その下にあつた黒い下着をそつと外し、中から白く輝く胸
を出した。

香川はなぜか目を逸らした。

見てはいけないと思ったのだろうか？

それとも別の理由？

そんな彼にお構いなしに、彼の口元に白い隆起の頂点にある出っ張
りを彼の口に押し付ける。

「香川さんだから・・・私のすべてをあげたいの」

西田の目は心醉していた。

彼の唇に触れることで彼を感じているらしい。
しかし、香川は断固として、その甘い誘惑が口の中に侵入してくる
のを拒んだ。

西田は彼の態度に苛立ちを感じ、腹にパンチを見舞った。

香川は低くうなつた。

西田はもう一発殴った。

香川は思わず咽こんだ。

西田は再び彼から離れた。

そして、男達に言い放つた。

「半殺しにして」

男達の目の色が変わった。

香川の表情も曇つた。

男達は顔を見合わせて、大きく頷いた。

香川は目を固く閉じた。

「もうダメだ！」

そう思つたとき、彼の頭に声が響いた。

君はどうしているの？！

どこかで聞いた声だった。

彼に、安らぎを与えてくれる声だった。

ただ・・・自分を必死で探している声でもあった。

その声の主は誰だろうか・・・？

香川はそんなことを考える暇も無く、強く心のそこから叫んだ。

俺は・・・している！

「聞こえた」

佐桐の肉体の一部が声を発した。

目を開き、宙の一点をじっと見つめる。

しかし、彼女の視界はその宙を捉えてはいない。

もはや目を閉じるのを忘れて、必死に彼の声の発信源を手繰つた。眉間に、苦痛とも取れるしわを寄せていた。

目元の筋肉が痙攣している。

額から頬に、一滴の汗が伝つた。

その汗は頬から更に顎へ伝い、自分の重みに耐え切れず顔から離れた。

その滴は、彼女の太ももへ静かに落ちた。

「・・・見つけた・・・そこだな！」

そういうと、佐桐は大きく息を吸い、ゆっくりと、聞こえない低い声を出して息を吐き出した。

再び息を吸い、またゆっくりと吐く。

佐桐の呼吸はどんどんどんどん荒くなつていった。

。

香川はなぜか目を開いた。

ゆっくりと、ゆっくりと開いた。

そんな香川に、気味悪さを感じた男共は一瞬表情を凍らせた。

男の一人が思わず、他の男の前進を手で制した。

それほどまでに、香川の動作は不気味なものであった。

香川はゆっくりと男共の顔をうががつた。

いや、香川の意思ではない。

香川自身、意識はあるが、誰かに操られているかのよう、その意思に従つていいだけであった。

(男が3人・・・その奥にいるのは・・・?)

(俺の会社の同僚の女・・・ちょっとイカれた感じの女だよ)

香川は聞こえない声に自分も声を発せず答えた。

(男を何とかしなくちゃね)

聞こえない声の主はゆっくりと語つた。

香川はそんな声に、恐怖心と安心感同時に感じるのであった。とりあえず、男共を制した代表の男が実力的には一番上なのだろう。この男を何とかすれば、この危機を回避できるかも知れない。

(あの中心にいる男に視線を合わせてくれる?)

香川は聞こえない声に従つた。

指示通り、男の目を見た。

男は一步下がつたが、香川の行為を「挑発」と受け取つたのか、表情を変えて襲い掛かってきた。

香川が漠然としたなか「まずい!」と思つたが、その意識はいつの間にかはつきりしていた。

そして、はつきりした頃には、襲い掛かるばずの男の動きが止まつていた。

男は痙攣を起こしていた。

いや、今まで感じたことのない感覚に、恐怖を感じていた。

胃袋を素手で探られているよつなの気持ち悪い感覚は何だ？・・・

男は必死に抵抗を試みた。

その様子を他の男共は、不気味そうに見ていた。

そして、遠くから、西田もその異変に気づくのだった。

「・・・なかなか難しいね」

佐桐は口を開いてどこかを見つめたまま、なぜか笑みを浮かべていた。

香川の意識は捉えた。

彼が現在置かれている状況も分かつた。

だが・・・

意識だけではどうしようもならない。

佐桐の呼吸が荒くなる。

肉体的にも相当堪える様だ。

抵抗する男の意識を探りながら、佐桐は一点の穴を見つけた。

「セキュリティホール発見」

そうつぶやくと、今度は固く口を開じた。

「つああ？！」

違う男が奇妙な声を上げた。

そのとたん、異変を起こした男が膝をがくんと落とした。

「何があつたの？！」

西田が遠くから男に声をかける。

「わからんねえ・・・急に胃が気持ち悪くなつたような・・・」

「昼間に変なものを食べたんじゃないの？！」

男の言葉に西田はヒステリックに言い放つた。
男は少しムツとなつたが、胃が気持ち悪いのか、その場で深呼吸を始めた。

奇妙な声を上げた男は、西田の問いかけに答える事ができなかつた。
目を大きく見開き、体をもじもじさせている。
胃が痛い男が彼に声をかける。

「お前も胃の調子が悪いのか？」

彼の言葉に、その男の表情が急に変わつた。
その表情は怒りに満ちていた。

「お前・・・俺の女に手をだしたな？」

彼の言葉に、男がびっくりした表情になる。

「そんなこと、今関係ないだろ？！？」

その言葉が火に油を注いだのか、奇妙な動きをしていた男が更に言つた。

「お前、俺の女と寝たな？」

・・・お前だけは信用していたのに・・・この野郎！！」

男はもう一人の男に殴りかかった。

男のパンチがクリーンヒットして、胃痛の男は大きな音を立ててひっくり返った。

脳震盪を起こした後、男はゆっくりと立ち上がり、奇妙な動きの男に殴りかかった。

そして、男一人は大乱闘を起こし始めた。

その様子を見ていた西田は、もう一人の男に

「何やつてるの…止めなさい…！」

と命令した。

しかし、もう一人の男の様子も一変していた。

男は香川を束縛していた紐を解いた。

そして、西田の方へ向かっていき、そして彼女の腕を乱暴につかんだ。

「な・・・なにするの…！」

西田は予想もしない展開に必死に抵抗するが、所詮女性。男の力にはかなわなかつた。

「なんであんな男なんだよ？ああ？

俺、前からあんたのこと、好きだつたぜ？

・・・いや、犯したいと思つていたよ」

そういうと男は下品に西田の唇を奪つた。

そして、彼女自らはだけっぱなしだった胸を、乱暴に、そしていやらしく触った。

「い・・・いやあああ！－！」

西田の悲鳴が部屋に響く。

拘束を解かれた香川は、今の状況にどうしたら良いのか混乱していた。

あっちは喧嘩が始まり、こっちは犯罪が起ころうとしている。
わよわよとしていると、香川の頭の中に声が響いた。

わざと逃げなさい。

香川は大慌てで部屋を去った。

佐桐はこの上ないおう吐感に見舞われた。

中身が出ないよう必死にこらえると、大きく深呼吸をした。
そして、そのまま仰向けにひっくり返った。

彼女の全身は汗でぬれていた。

「・・・男同士の関係も・・・いやだねえ」

天井をうつりに見ながら、そのまま深い眠りに落ちるのであった。

佐桐は会社で落ち込んでいた。

彼女には珍しく、遅刻をしたからだ。

しかも、電車遅延とかであればまだ納得がいくが、遅刻の原因は「朝寝坊」。

完ぺき主義の佐桐には許せない事だった。

確かに昨日はすごいことをした。

いつぺんに4人の人間の意識に中に入り込んだのだから。

しかし我ながらなかなかたいしたものだ、と感心もしていた。

しかし、こういうのは一度とゴメンだとも思っていた。

あの日からまだ間もないのに、こんなことになるうとは、自分的人生これから先どうすれば良いのだろうと、変に不安感もこみ上げてきた。

昨日の出来事で、香川の自分に対する想いを知ることができた。

しかし、彼女にとつて、知ることができたのは嬉しさよりも虚しさの方が大きかった。

やつぱり、相手の気持ちが分からぬからこそ人付き合いは楽しい、それがつくづく分かると共に、これから先、自分はそういう楽しみは味わえないんだという失望感でいっぱいだった。

「あー、でも、奴・・・私だとはわからないんだろうなあ・・・」

そんなことを思いながら、昨日の書かなかつた香川へのメールの返事を書いていた。

彼女は出社してこなかつた。

同僚に、西田の休みの理由をもつ嫌なほど聞かれたが、自分には分からぬ。

いや、昨日のことは思い出したくない。

そう思いながら、香川は仕事をしていた。

頬の腫れは、帰宅してから必死に冷やしていたから、今田には何とか引いた。

まだ痛みは残つてゐるが、腫れが引いたのでよかつたと思つてゐる。腹のパンチは帰宅してから苦しんだ。

幸い、西田の力だったのでももなく治まつたが、服の下は少々色が変わつてゐる。

1週間ぐらゐは取れないだらう。

昨日の声の主は誰だつたんだろうと、香川は考えた。正直、怖かつたが、それ以上に安心感もあつた。

実際に自分を助けてくれたのはあの声の主だろう。

人間、口ごろの行いが大事だなどふと思つてみたりもした。

(あの声は・・・どこかで聞いたことがあるような?..)

声と言つても、音声で聞こえてくるわけではないので、その判別はできない。

だけど、あの感覚は、どこかで味わつてゐるのは確かだ。

ただ、それがどこで感じた感覚なのか・・・分からぬ。

香川は自分の指から打ち込まれるアルファベットを見ながら考えていた。

そして、そのアルファベットの文字を遮るかのよつて、メール着信の知らせが表示された。

「・・・佐桐さんからだ」

誰にも聞こえないように小さく呑いて、メールをそっと開いた。
相変わらずどうでも良いジョークが書いてある。

本題の3倍はジョークだ。
全く。

この人は仕事をする気があるのだろうか。
クスクスっと笑いながら、香川はそのメールに返事を書く。
昨日の佐桐に書いた内容にお詫びを入れながら。
佐桐の事を考えながらメールを書いていると、どこからとも無く声
が聞こえた。

・・・私のこと、覚えてる？

香川は振り向いた。

しかし、そこには同僚が黙々と仕事をしている姿しかなかった。
香川は何事も無かつたかのように、自分のディスプレイに向かつた。
そして、メールの返信も書き終えて、送信ボタンを押したのであつ
た。

終わり

本編9（後書き）

一応恋愛物とこうじで・・・
この作品は6年前にイキオイで書いたものでして、読んでいてもそんな感じがしませんか？（爆
サクッと読んでくすと笑つてもらえれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7669e/>

タイプ

2010年12月31日21時18分発行